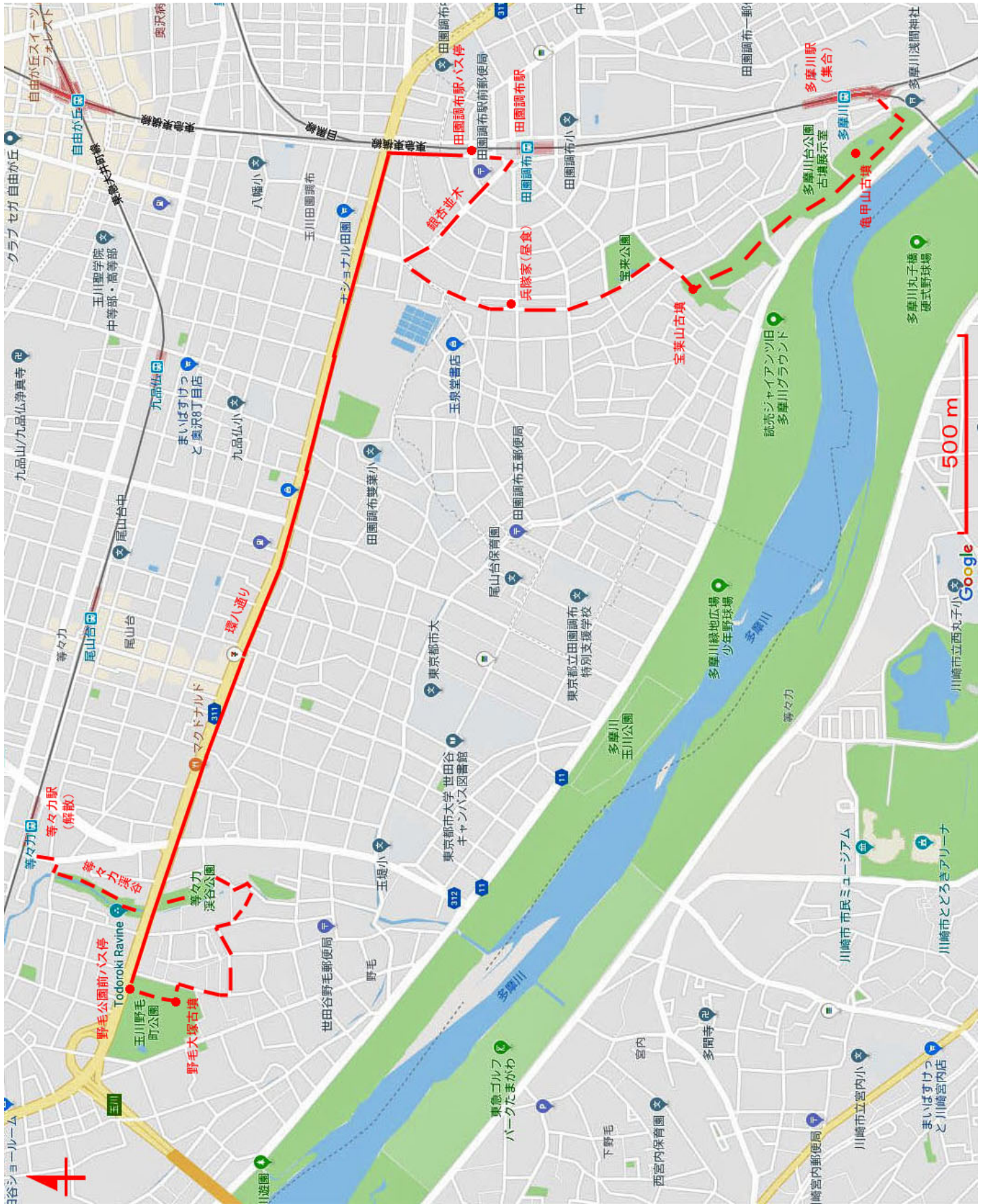


多摩川河畔の古墳群と等々力溪谷を訪ねる巡検(詳細資料)

全行程の地図



亀甲山古墳



田園調布 1 丁目に位置する多摩川台公園にある亀甲山古墳(国史跡)は、墳丘長107mの前方後円墳である

田園調布

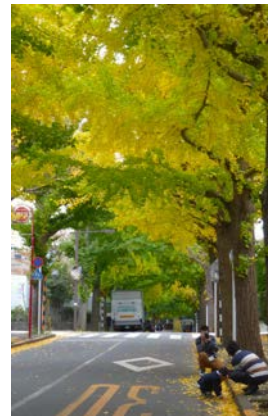
田園調布は1918年(大正7年)に渋沢栄一らが立ち上げた田園都市株式会社により開発された高級住宅地である。渋沢栄一が中心となって、イギリスで提唱された田園都市構想をモデルとした。その理念は、都市の外側を田園や緑地帯で囲み、企業も誘致し、交通渋滞や公害のない、住宅環境に優れた都市を建設するというものである。田園調布の駅前広場を中心に放射状に延びる街路は、当時のヨーロッパの都市に見られた特徴をそのまま取り入れた名残である。



東急東横線の田園調布駅

また国分寺崖線の良好な地盤の上にあることから、関東大震災後に都心から多くの人に移住した。開発当初からの駅西側に広がる扇状に整備された区画一体は、イチヨウの並木と相まって「高級住宅街」としての趣を備えている。

イチヨウ並木が色づく季節に街歩きを楽しみ、老舗の蕎麦屋「兵隊家」で昼食を摂る。



駅から広がるイチヨウ並木 老舗の蕎麦処「兵隊家」



田園調布には、実業家、政治家、タレントなどの住居が多く、洒落た住宅が並ぶ

野毛大塚古墳

野毛大塚古墳(のげおおつかこふん)は、東京都世田谷区野毛にある帆立貝式古墳(一種の前方後円墳)。東京都指定史跡に指定され、出土品は国の重要文化財に指定されている。

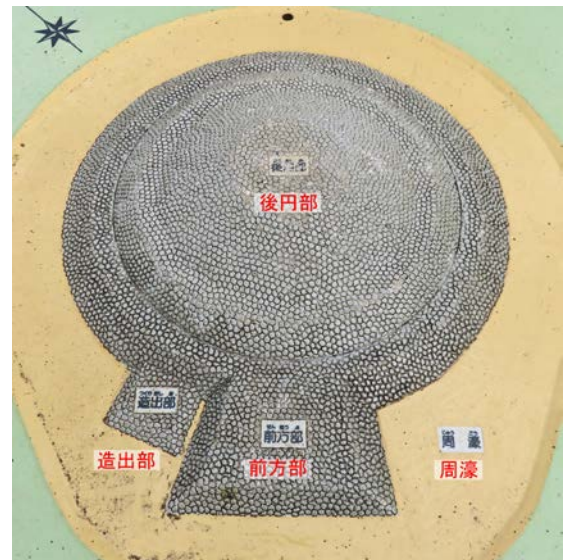
全長 82m、直径 66m、高さ 11mの円墳に小さな前方部が付いた帆立貝式古墳(ほたてがいしきこふん)としては日本国内でも有数の規模を誇る。1897 年(明治 30 年)に発掘調査がおこなわれ、石棺が見つかった。このときに見つかった多量の副葬品は、東京国立博物館に収蔵されている。

墳丘では葺石・埴輪が確認された。周りに馬蹄形の溝(周壕)がめぐらされている。後円部に埋葬用の棺が4基あり、その第1主体部は割竹型の本棺は長さ 8.2m、幅 0.8~0.6mの細長く、その中から短甲(たんこう)、冑(かぶと)、頸甲(あかべよろい)、肩甲、鉄剣、直刀 19 振り、鉄鏃 25 本以上、鉄製刀子、鉄鎌、銅鏡(内向花文鏡)、銅釧(どうくしろ)刀子・手斧などの石製模造品 19 点、玉類 2000 点以上、靫(ゆき)ないし矢筒などで出土した。

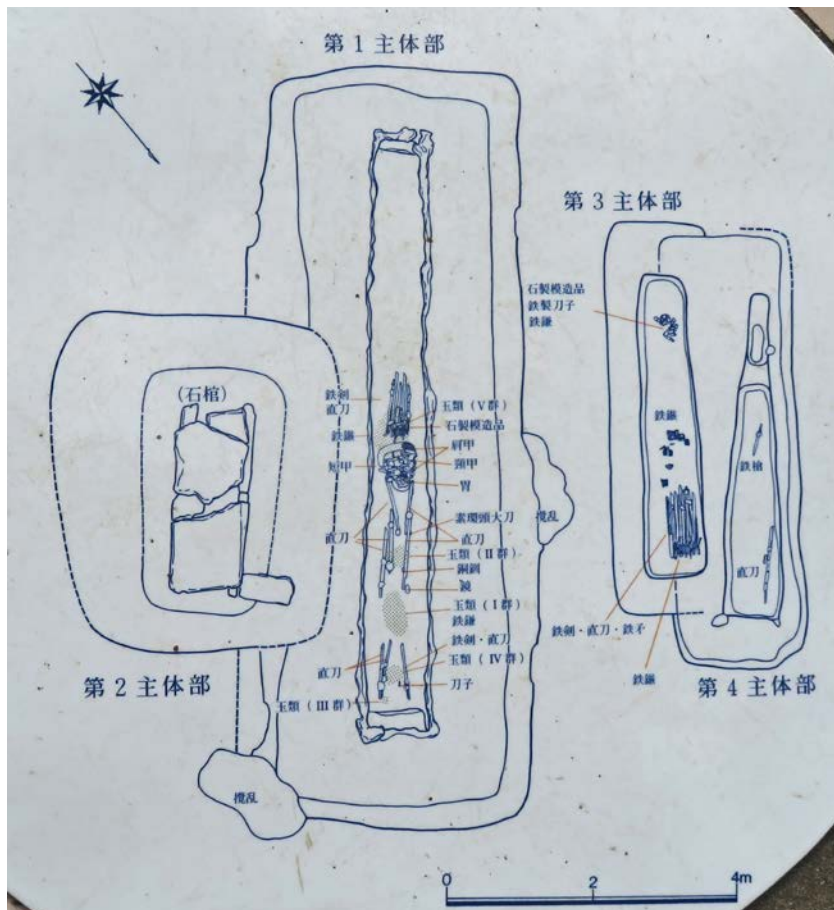
箱式石棺からは勾玉・管玉・臼玉・鉄刀・剣・甲冑片などの武器・武具、玉類などのほか、滑石によってつくられた多種多様で大量の器具類が副葬品として納められていることが確認された。滑石製模造器具は、石履、石の台・杯・盤・甑・斧、233 点におよぶ石製の刀子などである。刀子は 14 形式に分類されるなど、5 世紀代古墳の示標となる考古資料となった。



野毛大塚古墳



野毛大塚古墳の模型



野毛大塚古墳の後円部からの出土状況を示すタイル板

等々力溪谷(とどろきけいこく)

日本庭園・書院

等々力溪谷谷沢川の下流部、等々力不動尊の対岸に、昭和 36 年に建築された書院建物とそれを取りまく日本庭園がある。池、流れ、石畳の階段園路がある庭は、昭和 48 年に著名な造園家飯田十基氏により作庭されたものである。



日本庭園・書院

横穴古墳(東京都指定史跡等々力溪谷3号横穴)

溪谷の左岸崖面では、古墳時代末期から奈良時代にかけて構築された横穴墓が 6 基以上発見されている。中でも昭和 48 年に発見された 3 号横穴は、典型的な横穴墓の形態を留めていて、埋葬人骨や副埋葬品も良好であったことから保存措置が講じられた。



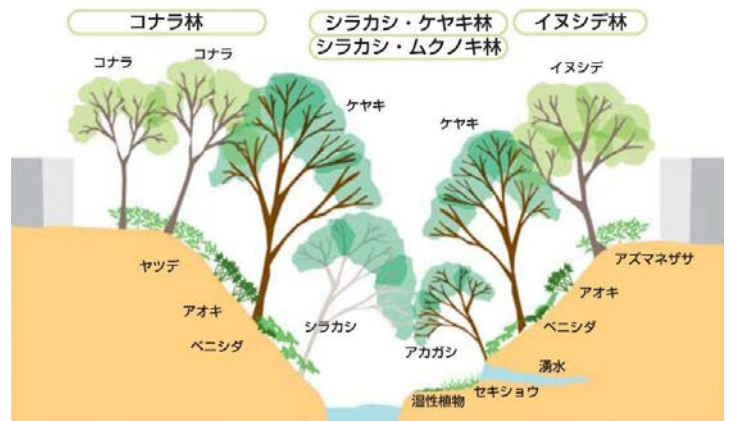
横穴古墳

横穴墓は奥行きが 13 メートルで、内部はとっくりを半分に割ったような形をしている。本横穴群の被葬者たちは、いずれも副葬品が豊富なことから、後の武蔵国荏原郡の等々力周辺を治めていた有力者であると推定されている。

植生

等々力溪谷の植生は、武蔵野台地の崖線の潜在自然植生と考えられるシラカシ群集ケヤキ亜群集であり、大径木を主体とした樹林地が溪谷の斜面に沿って連続している。

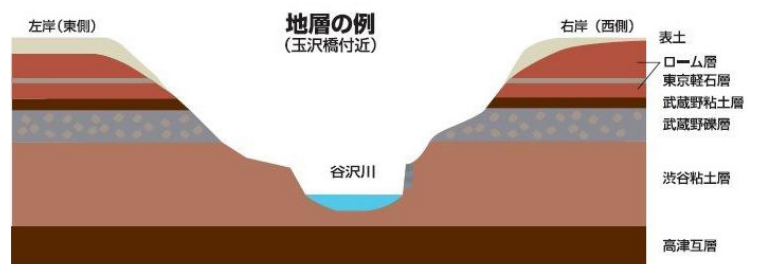
崖線の斜面部分には、主としてシラカシやケヤキ、ムクノキが、斜面地上部や台地面にはイヌシデやコナラが多く分布している。また、湧水が流下する緩斜面にはセキショウ草地が見られ、湧水が留まる場所には湿生植物が点在している。



植生

地形・地質

等々力溪谷は、武蔵野台地の南端に位置しており、この台地面を浸食して形成された開析谷である。溪谷沿いには武蔵野台地を特徴づける地層断面がよく観察できる箇所がある。地質の分布状況は、下から、台地の基盤である上総層群の高津互層、その上に堆積する渋谷粘土層、武蔵野礫層、武蔵野粘土層、東京軽石層、ローム層の順にほぼ水平に堆積している。また、渋谷粘土層と武蔵野れき層の間からは、湧水が多く見られる。

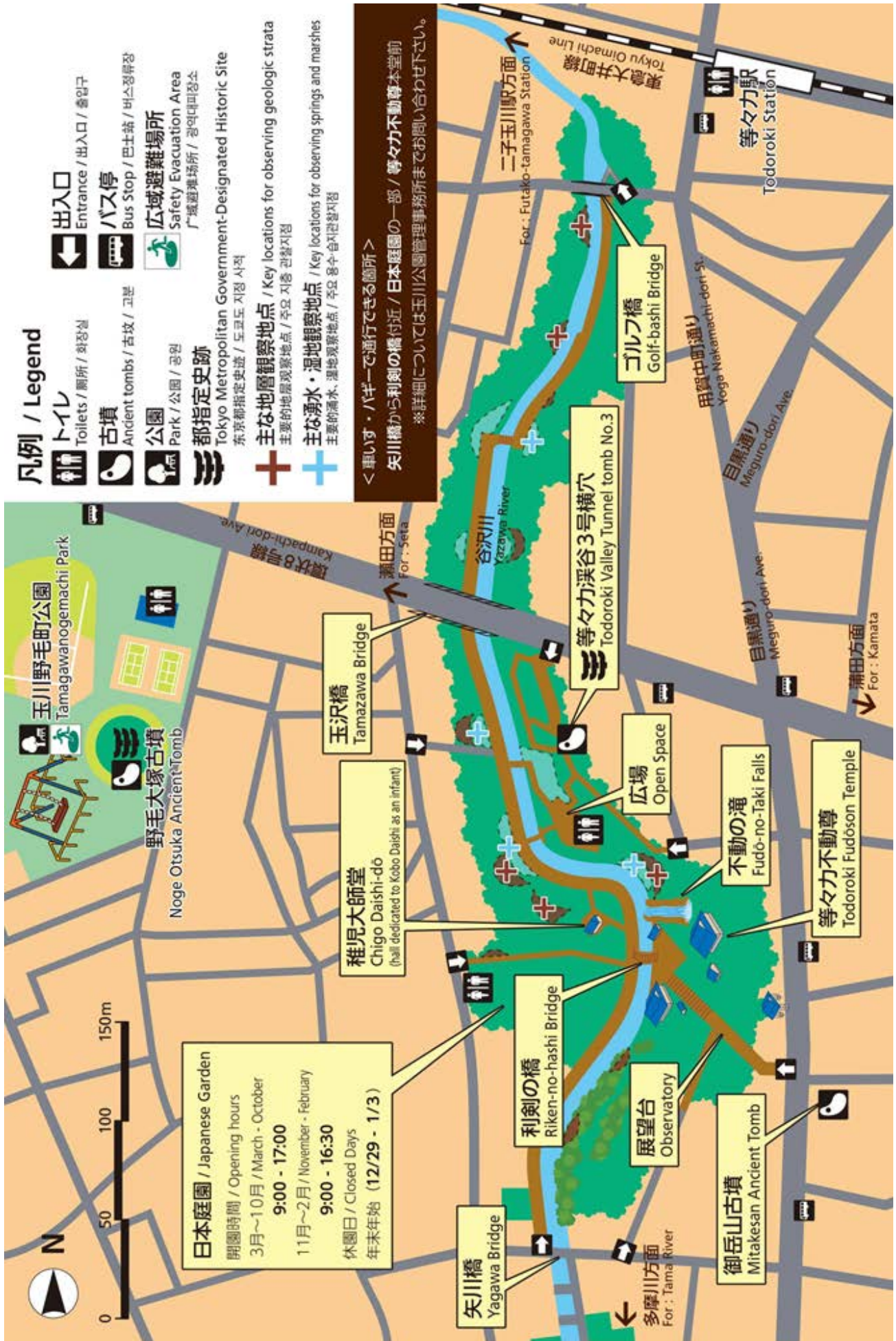


等々力溪谷の自然環境保全保護に関する基本調査報告書(昭和54年2月世田谷区)をもとに作成

ゴルフ橋付近で観察できる地層



木の根元付近が、礫層と高津互層の境目

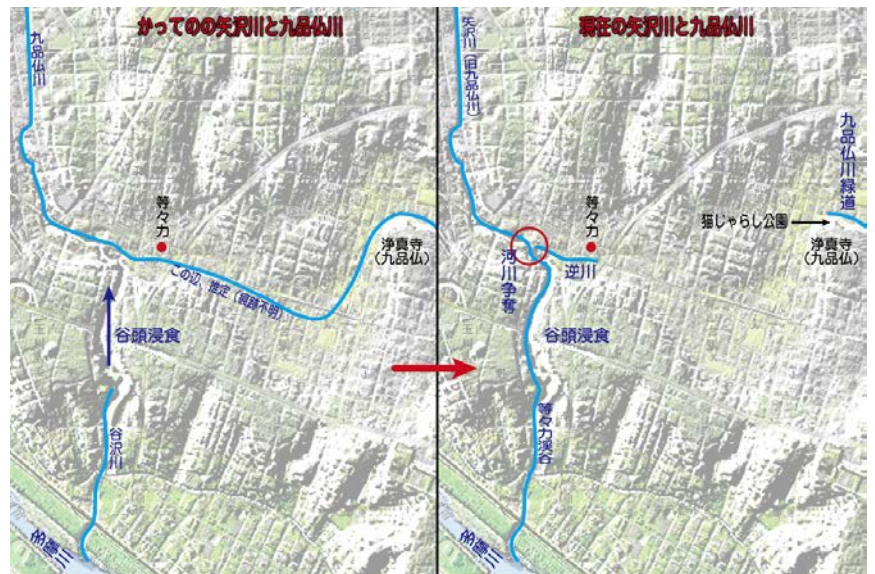


谷沢川(等々力溪谷)の河川争奪

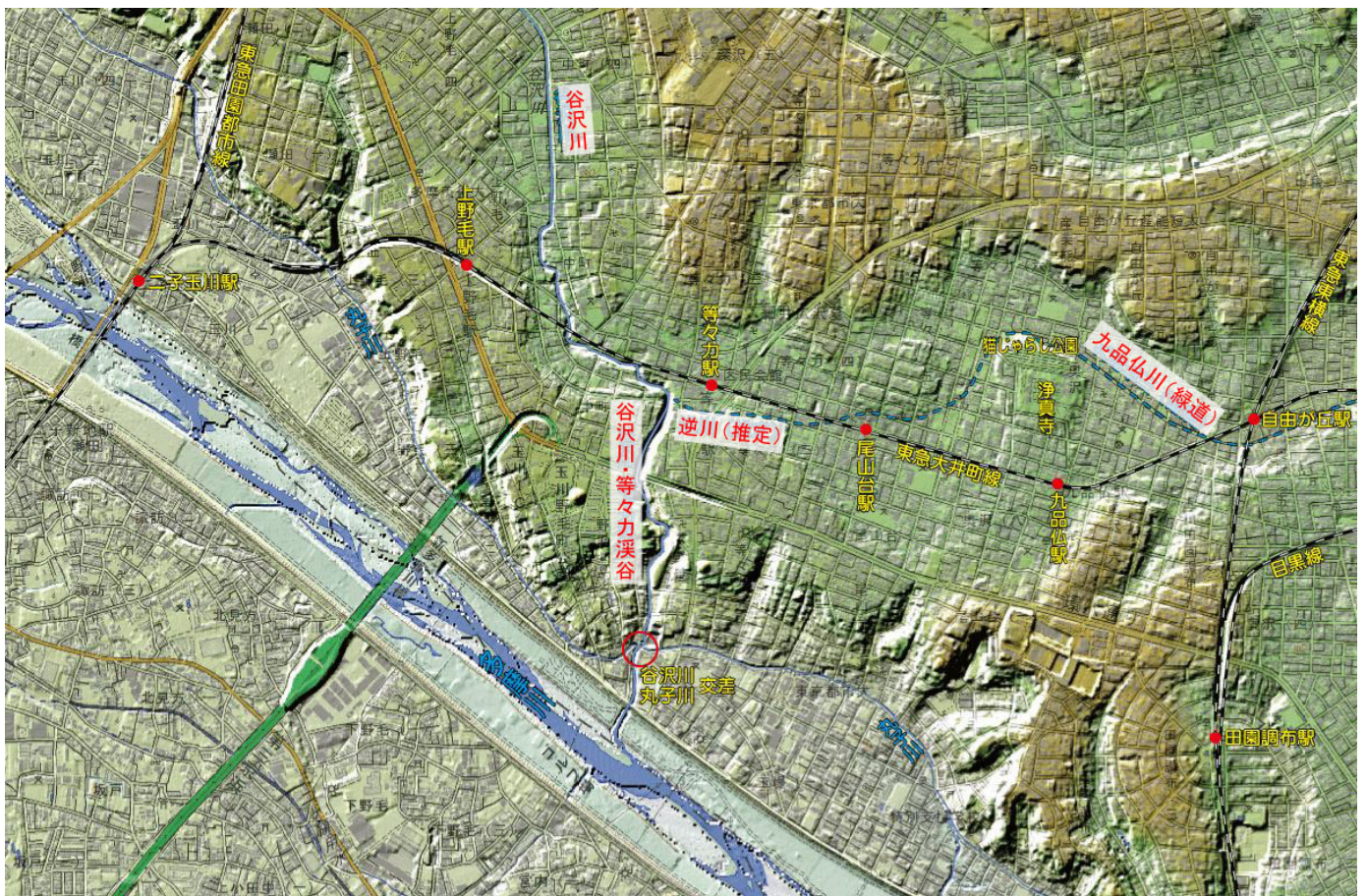
地理学・地形学に、河川争奪という言葉がある。例えば流域が隣接する二つの河川A・Bがあり、片方の河川の地形への侵食力が著しく強く、A・B河川が近接していた時、洪水などが切っ掛けとなって、A川上流の流れが、奪ったB川に流れてゆくようになってしまい、奪れたA川の下流方には、水の流れない河道地形が残ったりしてしまうことがある。このような河川争奪地形は、全国的に見られる。

都内の世田谷区内の等々力溪谷でも、九品仏川と、等々力溪谷を流れる谷沢川の谷頭侵食によって河川争奪が起きている地形がある。この界隈を流れる谷沢川は、世田谷通りを越えた桜ヶ丘辺りから流れを発し用賀住宅街一帯の雨水・湧水を集めて流れ、現在は等々力溪谷を流れて多摩川に注ぐ1級河川である。

しかし昔は、用賀界隈一帯から発生する雨水・湧水等は、用賀・中町・等々力と流れ、九品仏の北側の湿地帯から自由ヶ丘方面に流れて呑川に流れ込んでいた。用賀・中町を流れる川は、昔は九品仏川の上流部であったのだ。しかし何時の頃だか、等々力付近の国分寺崖線から流れ出していたハケの細流の侵食が進んで九品仏川の流れを争奪してしまった。そして今は、暗渠になって分からないが、等々力付近の下流は、九品仏北の湿地帯辺りから今までの川の流れが逆に流れて、逆川となって等々力溪谷に落ちていた。



谷沢川・等々力溪谷形成の謎（河川争奪説の他に人口開削説もある）



谷沢川・九品仏川・等々力溪谷・多摩川付近地形図